

氏名（生年月日）	<small>オオ</small> <small>タ</small> <small>ミノル</small> 太 田 稔（1983年12月21日）
学位の種類	博士（哲学）
学位記番号	文博甲第136号
学位授与の日付	2019年7月26日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	アリストテレス『デ・アニマ』における固有感覚論 —感覚の生起における作用の受動の問題—
論文審査委員	主査 土橋 茂樹 副査 村井 則夫・濱岡 剛

#### 内容の要旨及び審査の結果の要旨

#### I. 本論文の構成

本論文は、短い序に本論が五章続き、最後に結で締め括られる構成となっている。詳細は以下の通りである。

序

第一章 アリストテレスの『デ・アニマ』における心身問題

はじめに

第一節 現代の機能主義とアリストテレスの距離

- 1.1 アリストテレスの魂論に対する現代の解釈
- 1.2 プラトンと心身問題
- 1.3 マトソンの解釈

第二節 アリストテレスの方法論

第三節 アリストテレスによる先行見解批判 ——プラトンとプレソクラテス——

- 3.1 DA I.1 ——魂と身体のパトスの同時生起——
- 3.2 先行見解の紹介と批判 ——運動の原理としての魂——
- 3.3 DA I.5 ——類似説批判——

おわりに アリストテレスの心身問題

第二章 ソラブジ・バーニェット論争の概観

はじめに

第一節 バーニェット解釈の登場まで

- 1.1 ソラブリジ解釈以前
  - 1.2 スレーキエーの解釈
  - 1.3 ソラブリジの解釈
  - 1.4 バーニェットによるソラブリジ批判
- 第二節 バーニェット以後
- 2.1 ヌスバウムらの反論
  - 2.2 バーニェット解釈の意図
- 第三節 現代の解釈とその問題
- おわりに 心身論と感覚論

### 第三章 アリストテレスの『デ・アニマ』における同名異義問題と質料形相論 ——魂論の出発点——

- はじめに
- 第一節 アクリルの同名異義問題
- 第二節 同名異義問題の多様性
- 2.1 同名異義の三つの用法
- 第三節 『デ・アニマ』における質料形相論と結合体の関係
- 3.1 質料の三つのタイプ
  - 3.2 『デ・アニマ』における質料形相論
- おわりに 魂論における出発点と感覚の問題

### 第四章 論争の深化

- はじめに
- 第一節 『デ・アニマ』Ⅱ.5 導入部
- 1.1 『生成消滅論』における類似化説批判
  - 1.2 先行見解の問題点と可能態現実態論
- 第二節 『デ・アニマ』Ⅱ.5 中心部
- 2.1 可能態の分析
  - 2.2 消滅的作用と保存的作用
  - 2.3 二種類の性質変化
  - 2.4 中心部総括 ——導入部と中心部の連結——
- 第三節 『デ・アニマ』Ⅱ.5 結論部
- 第四節 アリストテレスの視覚論と媒体
- 4.1 感覚論における媒体
  - 4.2 感覚対象のもつ実在性と光の存在論

### 4.3 光の運動論

おわりに

## 第五章 形相受容の原則とアリストテレスの感覚論

はじめに

### 第一節 形相受容の原則にかんする諸問題

- 1.1 「質料抜きで」 (ἀνευ τῆς ὕλης)
- 1.2 形相受容の主体
- 1.3 「比によって」 (κατὰ τὸν λόγον)

### 第二節 作用の受動と感覚

### 第三節 アリストテレス感覚論の広がり ——形相受容の内実——

結

## II. 本論文の概要

本論文の目的は、アリストテレス『デ・アニマ（魂について）』における感覚論をめぐって 20 世紀後半に始まりいまだに議論の絶えないリチャード・ソラブジとマイルズ・バーニェットの間でなされた論争（以下、「SB 論争」と略記する）の中に著者独自のアリストテレス感覚論解釈（その中でも特に視覚・聴覚・臭覚・味覚・触覚といういわゆる五感にあたる「固有感覚」に関する解釈）を位置づけ、それをもってその論争に何らかの解決の途を見出すことにある。したがって、本論文の構成は、大きく分ければ前半の第一章、第二章において現代の心身問題および SB 論争を概観した上で、後半の第三章以降において、アリストテレスの感覚論をテキストに即して詳細に考察し SB 論争の乗り越えを図るといふ 2 段構えになっていると言えるだろう。

具体的に見れば、まず第一章において、現代における心身問題とは異なった魂－身体関係の捉え方がアリストテレスに見出されるということを示すために、『デ・アニマ』において先行研究者（いわゆるプレ・ソクラテス）の魂観とアリストテレス自身の魂観との共通点と差異を読み取ることのできる第一巻が概観される。一般にアリストテレスの感覚論を解釈する際に、彼がプラトンの二元論と、プレ・ソクラテスの一元論的、唯物論的な解釈との間で自説を打ち立てようとしていたと解されることがよくあるが、こうした解釈は『デ・アニマ』第一巻を正確に読み取る限り、誤った理解であると著者は主張する。著者によれば、こうした解釈は、プラトンやアリストテレスがデカルト的な意味での心身問題を扱っていたという前提に立つ時代錯誤的な議論であって、そもそも古代ギリシアにおいて、それぞれが独立した精神と身体の相互関係を問うというような問題意識自体がなかったとされる。では、アリストテレスの問題意識はどのようなものであったのか、この点を正しく理解するためには SB 論争を正しく理解し、克服する必要がある。

そこで、続く第二章においては、SB 論争史の概観がなされる。この論争は、1973 年にソラブジが提示したアリストテレスの感覚論解釈に対して、1992 年にバーニェットが反論したことをきっかけ

に多くのアリストテレス研究者を巻き込む大規模な論争へと発展したものである。バーニエットの主張は、アリストテレスの感覚論を現代の生理学的な感覚論に引き付け、機能主義的に解釈する自然主義的な立場への批判である。言い換えればそれは、感覚の生起においてアリストテレスは文字通りの身体的（物理的）変化を要請しているというソラブリジの主張に対する反論であり、さらにはアリストテレスの心の哲学は現代の我々には理解し得ないがゆえに彼の感覚論は現代にはもはや馴染まないものであるという強烈な主張である。

こうした主張に対して、バーニエットから名指しで批判を受けたマーサ・ヌスパムら多くの論者によって、アリストテレスが心身の相互関係を論じているとみなされるテキスト箇所を次々と指摘する様々な再批判が行われてきたが、それと同時に、バーニエットを擁護するような主張もそれに劣らず数多く繰り出された。こうした状況の中で、2000年以降この論争は、『デ・アニマ』第二巻第五章における「可能態／現実態」と感覚の関係に関する具体的なテキスト解釈に議論の場を移し、バーニエットの主張に対する賛否が繰り広げられることとなったが、そんな中で、ソラブリジ、バーニエットの両立場を止揚するような解釈もまた登場してきた。この第三極は、アリストテレスの感覚論が、『デ・アニマ』第二巻第五章におけるような、通常の性質変化とは異なる特殊な変化としての感覚の側面（バーニエットの立場）を認めつつも、感覚器官においては通常の性質変化を認める（ソラブリジ寄りの）立場であり、本論文も、こうした第三の立場を模索するものである。

以上を承けて、まず第三章においては、アリストテレスの感覚論における〈作用の受動〉の問題を論じるための予備考察として、アリストテレスの心身論が検討される。その際、J. L. アクリルによる重要な批判、すなわち魂を形相・現実態、身体を質料・可能態とみなすアリストテレスの質料・形相論に基づく魂－身体論は、魂をもった〈生きている〉身体と魂をもたない可能態としての身体が同名意義、つまり両者が異なるものとみなされる以上、彼自身の同名異義原理と矛盾するという批判を介して、「質料・可能態としての身体」という存在身分そのものが改めて問い直される。本論文は、浜岡論文（1995）によるアクリル批判に基づきつつも、それとは異なる観点からアリストテレスの『デ・アニマ』に固有な同名異義原理と質料・形相論を取り上げることで、同書における同名異義の主張が、質料の同一性を破壊するものではないことを立証する。その上で、アリストテレスの質料・形相論が観点依存的なものであり、たとえば人間の腕は身体全体に対しては質料の役割を果たすが、腕を構成するさらに微細な部分に対しては形相の役割を果たすというように相対化された二元性のもとで身体器官が論じられており、きわめて柔軟な仕方では生物の存在論的分析が可能となっていることが示される。

続く第四章では、バーニエットが自説を展開する際の主要な根拠となっている『デ・アニマ』第二巻第五章がきわめて高い文献学的精度をもって詳細に解釈される。当該テキストにおいてバーニエットは、通常の物体同士の相互作用とは明確に異なるものとして感覚が位置づけられていると解釈するが、2000年以降、反バーニエット陣営の批判の矛先はこのテキストに集中し、バーニエット解釈とは異なる多様な解釈の試みがなされてきた。その中で最終的に本論文は同テキストを以下のように解釈する。すなわち、確かに感覚における変化はバーニエットの主張するように同書第二巻

第五章の中心部では通常の物理的相互作用とは異なる特殊な変化とみなされ得るが、だからと言って必ずしもそれが感覚における〈作用の受動〉という通常の生理・物理学的なプロセスを全面的に除外するものとは言えない（つまり、中心部以外の箇所においては、ソラブジが主張するように、感覚は一貫して〈作用の受動〉に基づいた変化として論じられていると解され得る）。

次に本章は、バーニェットの主張の根拠として、『デ・アニマ』第二巻第五章の解釈だけでなく、彼の「光」の解釈に注目する。バーニェットは、光という視覚の媒体を非物体的かつ非運動的なものと解釈することで、そうしたものが眼という感覚器官に対して通常の物理的作用を及ぼすことはあり得ぬと主張しているわけだが、著者によれば、光が空気という物体（四元素の一つ）の現実態であり、あくまでもそのような物体として限りで視覚の媒体の役割を担っている以上、彼の主張する「非物体性」「非運動性」が完全な「非物体性」、完全な「非運動性」を表しているとは言い難い。

最後に第五章においては、ここまで本論文がアリストテレスの感覚論の、いわば質料的な側面について研究をしてきたのに対して、その形相的な側面を検討することで、アリストテレスの感覚論の全貌を「質料的側面・形相的側面」の結合体として明らかにしていく。その際、中心的に検討されるテキストは、SB 論争の出発点となった形相受容の原則（すなわち「感覚は感覚対象の形相を質料抜きで受容するものである」という規定）が議論される『デ・アニマ』第二巻第十二章である。形相受容の解釈問題は、1. 「質料抜きで」という言葉の解釈、2. 受容の主体、3. 「比によって」という言葉の解釈という三つの問題の検討を通じて、アリストテレスが形相受容によって感覚を通常の機械的な作用の受動によって生じるものとしてだけでなく、生物の「生」の一部としても積極的に位置付ける根拠を提示する。比を構成する感覚は、生理的「快」「苦」を生み出すものであり、快苦は動物の行動傾向と一致するが、さらに人間において感覚における比の受容は、ロゴス論から知性論へと移行する。

こうした検討を通じて最終的に本論文においては、アリストテレスの感覚論が、単にボトムアップに生理・物理学的な相互作用として説明されるだけでなく、それらには還元され得ないアリストテレス固有の哲学的原理をもたらす生産的な問題領域として位置づけられる。

### Ⅲ. 本論文の意義

本論文の最大の意義は、SB 論争を単にソラブジ、バーニェット双方の主張を対比的に考察するだけでなく、双方の陣営の立論を論争史全般にわたって広くサーベイし、この論争の全体像を包括的に把握した上で、その主要な論点を改めてアリストテレスの当該テキストに立ち戻って徹底的に再検討した点にある。その結果、現代的な心身問題の前提にとらわれることなく、「質料」と「形相」、あるいは「可能態」と「現実態」というアリストテレス哲学における最重要概念を、固有感覚論というある意味ではもっとも下部構造的な、いわば自然学と形而上学の闊的領域から規定し直す試みへと結実させた点が、本論文においてもっとも評価に値する点である。

また、SB 論争の主戦場であり続けた問題、すなわち、感覚を感覚対象に由来する物的運動によつ

て感覚器官が被る受動（パトス）、本論文が〈作用の受動〉と呼ぶところの通常自然科学的变化と、感覚対象と感覚能力の双方に共通に生起する可能態から現実態への「特殊な変化」との関係、『デ・アニマ』第二巻第五章のテキストの一字一句に即して徹底的に解釈し直した点が本論文の第二の意義である。

第三の意義としては、感覚能力と感覚対象の関係の哲学的考察に集中しがちであった従来の『デ・アニマ』解釈状況にあって、視覚における光のような「媒体」に焦点を合わせ詳細に分析がなされた点が挙げられる。「媒体」としての光の考証は、バーニェット解釈の妥当性をアリストテレスのテキストに即して検証するためばかりでなく、アリストテレスの感覚論に対する自然主義的な解釈の妥当性を評価するためにも、極めて重要な位置を占めていると思われる。しかも、単なる「光の自然学」にとどまらず、「光の存在論」へと論を進めた点にも今後の解釈の方向が示唆されており、評価に値する。

最後に第四の意義として、単なる固有感覚論という閉塞した問題意識にとどまることなく、アリストテレスの生物学への広範な取り組みを背景にした、まさに「生きている」生物たちの多様な生態系としての自然を視野に入れた感覚論構築に向けられた著者の研究志向は、十分に評価されてしかるべきであろう。この点が、現代のアリストテレス『デ・アニマ』解釈において有力な位置を占める機能主義的解釈を批判的に再考する際に、極めて重要な論点となることは間違いないだろう。

#### IV. 本論文の評価

あえて本論文の課題をいくつか指摘しておきたい。

本論文の一般的傾向として、アリストテレスの一次文献であれ二次文献であれ、テキストの細部に至るまで完全にフォローしたいという思いのあまり、次々と議論の枝葉へと記述が拡散し、最終的にそれらを回収すべき大きな解釈上のビジョンのようなものが見出せぬまま終わる場面も散見される。一方でテキストの細部にまで文献学的な精度を求めることは本論文のような古典解釈を主とする論考においては必須の要件であるが、他方で「木を見て森を見ない」ような解釈上の陥穽に陥ることがあってはならない。

そのせいであろうか、せつかく詳細に議論を詰めていったにもかかわらず、問題の解決を安易な図式的解釈に落とし込んでしまう弊が時に見受けられる。とりわけ、本論文の前半のポイントであったSB論争の克服として提示された、なかば両論併記的な解釈案は、きわめて図式的な論点整理に過ぎず、バーニェットがなぜソラブリジ説にあれほどまでの強い反論を提示せねばならなかったかという真の動機、強いて言えば現代の古代哲学テキスト解釈全般に見出され得る自然主義的傾向に対するある種の危機感のようなものを真正面から受け止め理解するところまでには至っていなかったのではないだろうか。そのせいで、個々の論点に対しては極めて精緻な議論を展開しながら、それら全体を繋ぐ哲学的思索が表層的な印象を与えてしまった感がなきにしもあらずである。

また、アリストテレスのテキストに即して言えば、〈作用の受動〉としての変化に関する記述において、アリストテレスの自然学に固有の考察方式と、現代の生理学等のそれとをどれほど明確に

区別し、その上で双方から過不足のない記述がなされていたか、いささか疑問である。その両者を曖昧に「生理的・物理的プロセス」として一括して論じている場面が随所に見られるが、それはアリストテレス自然学解釈としては明らかにミスリーディングである。

最後に、著者は確かに固有感覚論をアリストテレスの生の哲学全体から読み直す必要性を説いているけれども、本論文のとりわけ第三章以降を見る限り、固有感覚論をそれ自体として独立に論じる場面が（方法論上、やむを得ぬ点があることは理解できるが）随所に見出され、アリストテレス哲学をより広い研究視野から展望し議論を展開していく面で物足りなさを感じざるを得ない。その典型的な例が、本論文第四章で『デ・アニマ』第二巻第五章がこれ以上ないほど詳細に論じられながら、本論文第五章で「質料抜き形相受容の原則」というアリストテレス感覚論にとっての最重要課題である『デ・アニマ』第二巻第十二章の考察が拍子抜けするほど表層的な分析で終わっている点に見出される。本来なら、この第五章こそ本論文のクライマックスになるべきところだが、本論文では『デ・アニマ』第二巻第五章の分析で力尽きた感がある。固有感覚論を起点にしてアリストテレス哲学全体への展望が望まれるにもかかわらず、固有感覚論という狭い領域に自ら議論を狭めることで解釈の確実性を担保しようという戦略は、結果的に諸刃の刃となってしまう、本論文のスケールをやや小粒なものにしてしまった感があるのは残念である。

とはいえ、以上のような難点があるにもかかわらず、「Ⅲ 本論文の意義」においても縷縷述べたように、本論文のもたらしたアリストテレス研究上の貢献は実に豊穡かつ意義深いものである。また、個々のギリシア語テキストの解釈も行き届いており、アリストテレスの感覚論、あるいは『デ・アニマ』というテキストが抱えている問題点が実に詳細かつ精緻に別出されている。今後の『デ・アニマ』研究とりわけ固有感覚論研究を大きく前進させる基礎研究として本論文が果たすべき役割は極めて大きいと思われる。

以上の点より、本論文は博士学位を授与するのに十分値するものとして高く評価できるものである。